Incarnation

蒼司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｎｃａｒｎａｔｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ００３７Ｈ

【作者名】
蒼司

【あらすじ】
小さい頃の記憶がまったくない少年、篠宮優。孤児として引き取られ重い心臓の病をもつ義姉の舞との生活が彼の日常になっていた。大して記憶を取り戻そうと思うわけでもなく平和な日常が過ぎていく。しかし運命は非情なことに次々と彼の元にやってくる先導者という異能を使う者達。彼に秘められた謎とは・・・。それらが明かされるとき物語は収束する。

プロローグ

すでにそこには何も残っていなかった。

決して晴れ渡ることのない赤い空に原形をとどめていない黒い岩。

その光景を目にしたものは何を思うだろう。

絶望と虚無感の狭間でゆれていた少女の元に銀の光をまとった一枚の羽が舞い降りる。

くるくると宙を待って地に落ちた羽は一瞬にして粒子となって散った。

残された一人の少女。

泣きじゃくる彼女を遥か上空から眺め冷たい笑みを浮かべる一人の男。

そう。

それは今からずっと昔の出来事。この世の希望が失われた瞬間であった。

プロローグ（後書き）

さてこの物語、いったいどうなっていくのでしょうか？
かなり細かいところまですでに出来ているので進むスピードは速くいけると思います
なにぶん文が稚拙なものでそれでも良かったら読んでやってください！

暑い夏の日のこと（前書き）

ほんのさわりになりましたがアップです！
しばらく暑い夏の日のことという章は続きます。
本当は一気に載せたいんだけど打つのが遅くて遅くてw
でもがんばりまっす！

暑い夏の日のこと

季節は夏。

散った桜の花びらが泉市を東西に分ける穂菜川（ほながわ）に浮かんでいる。

そんな景色を病院の窓を通してみている一人の少女がいた。

彼女の名前は篠宮舞。

重い心臓の病気のため小学校に入る以前から入院生活を余儀なくされている。

彼女は今年で１７歳になるのだが、病院での生活のほうが自宅で生活した年数より長い。

両親は不運な交通事故により今はいない。

そんな生きる希望を失ってもおかしくない状況の中、心の支えになっているのが篠宮家に養子として引き取られた弟の優（ゆう）である。

彼は舞と同じ年でありその気質もとても明るい好青年だったことが何よりも舞の救いになっていたのかもしれない。

「今日も来たぜ舞。体調は悪くないか？」

窓の外を眺めていた舞に優が声をかけた。

彼女の瞳に移った彼の姿はほとばしる汗を必死にタオルでぬぐうものだったので、ついついおかしくて笑ってしまった。

「暑そうだね、優君。」

はい、と代わりのタオルを差し出す舞。

「さんきゅー・・・にしても今日はやけに暑いな。」

ようやく暑さが抜けた優はドンと病室に備えられている机の上に大き目の木箱を置いた。

「ほら、前に言ってたアレさ。」

そういいながら優が箱を開けるときれいに束ねられた蕎麦があらわれる。

「元村おじさんの手打ち蕎麦なり！」

「うわぁ～おいしそうだね！」

舞の表情が見る見るうちに笑顔で緩んでいく。

「だろ？舞が食べたいって言うからおじさんに頼んで特別に頼んでもらったんだ。」

ぽんぽんと舞が彼の頭を触った。

これは昔からの舞のくせでありがとうの変わりにとる行動である。
優もこの年になっても嫌がることはなく、素直にそれを受けている。

「はやくしないと伸びちゃうよ、蕎麦。」

優に促され舞は用意された蕎麦をすすってみる。

「うん、とってもおいしい！」

おなかがすいているのか、病院食を食べているときより箸の動きが速いようにも見える。

優はひとまず近くに置いてある来客用の椅子に腰掛けた。

「にしても舞・・・・ここ寒くないか？冷房が効きすぎてるような・・・・」

「外は暑いもんね・・・もうちょっと上げようか。」

枕の下に隠してあるエアコンのリモコンを取り出し２６度くらいまであげる。

優が徐々に心地よくなってくる頃には舞は蕎麦を食べ終えていた。

「今日は速いね、舞。」

「うん。とってもおいしかったから。」

本当は規定された食事以外は禁じられているのだが今日は特別に舞が許可を取れた。

舞は食事を終え机の引き出しにしまってある薬の袋を取り出す。

かなりの量であるが今はまだ少ないほうだと優は彼女から聞いていた。

一回分の量を一気に水で飲み干すとぐったりした顔で舞がつぶやく。

「やっぱりいつまでたっても薬はおいしくのめないね・・。」

「そうだよな・・おれなんか普通の風邪薬でも無理だし。」

はは、と二人で笑いあう。

そんな他愛のない会話がずっと前から続いてきたのである。

ふたりともそれ以上を望まずこうして過ごしてきた。

「それじゃ、俺そろそろ帰るわ。」

面会時間ぎりぎりで来たために優は帰りの支度ををはじめる。

「ありがとうね、優君。」

暑い夏の日のこと2

病院からの帰り道、泉市内のメインストリートでもあるサンライズ通りを歩いていた。

この通りは、泉市民が一同に集まるといっていいほどの商店街で主だったものは全てここでそろえられるといわれている。

病院での見舞いの帰りにこの通りに向かうのは彼の日課であり、今では商店の人達にもかなり顔を知られた存在となっている。

もとい先ほど優が持ってきた元村蕎麦もこの通りに店を構えている。

一通りの買い物を済ませスーパーの中から外に出るとよく知った顔を彼は見つけた。

「おーい千鳥(ちどり)〜。」

名前を呼ばれた女子高生は驚いたように振り向いた。

「なんだ・・・優か。そんな大声でいわなくても。」

笑いながら近づいてくるのは黒いリボンが印象的な見るからに気さくな少女である。

優や舞との幼馴染であるこの少女、赤井千鳥は自宅も篠宮家と隣に住んでいて何かと優は面倒を見てもらうことが多かった。

「病院の帰りかな??」

優の行動パターンを知っている千鳥にとっては聞くようなことでもなかったが二人のこうした会話はずっと続いている。

というのも優が病院にいけないときは変わりに彼女がいくことなっているからだ。

そのために、なにか舞に起きたときのために緊急の連絡先として千鳥の家も指定されている。

彼女も病院に行くことを少しも苦に思っていないらしく暇があったら顔を出してくれているのは優も知っている。

そんな彼女は生徒会に所属するなどといったは優と違った活発さがあり多くの生徒に慕われている。

「まぁ、そんなとこ。元村のおっさんの蕎麦、おいしそうに食べてたよ。」

にっこりと笑って報告する優の姿がほほえましく彼女には見えた。

（いいな、幸せそうで。）

そっと心の中で彼女は思う。

「あのさ、優。今から空いてる？」

家に向かって帰ろうかと優が思っていた矢先、千鳥がそう口にした。

いやな予感がして少し優がためらっているとその腕を無理やり引っ張って家とは逆の方向に連れて行こうとする。

「またあそこにいくのか？」

優の問いに、ご名答とだけ答えて半ば強制的に彼を引っ張っていく千鳥。

これといっておかしな場所ではないのだが優には彼女が何故あの場所に行きたがるのかが今でもよく分かっていない。

多いときは月に3回ほど市の設立した美術館に行くのだ。

この泉市美術館といういかにもローカルな名前をしている美術館は

サンライズからは少し離れた所に位置していて穂菜川のほとりにひっそりと立っている。

優も一度だけ中に入ったことがあるのだが受付のところに係りの人がいるだけで展示物には一切見張りがいないといったほどの存在だった。

しかしその美術館、一見して有名な作品ではないのだが優にはそこにあるものに妙な親近感を覚えていた。

絵画、彫刻、誰のものかわからない泉市から出土されたとされる冠やらアクセサリーが飾られていたのは覚えている。

しかしその一回きりで優はなんとなく中に入る気がしなくなり、千鳥に連れてこられても外で待ってるのが普通になっていた。

「それじゃ私はいってくるから荷物だけはきちんと見張っていてね。」

そういって彼女は中に入っていった。

優は美術館の隣につけられている階段に腰を下ろす。

赤く焼けるような夕日に暗くなっていく空。

巣へと帰っていく鳥たちが何かをわめきながら円を描いて飛んでいく。

そんな風景をみていると、ふと全ての音がやんだ。

「なんだ・・・？」

周りに歩いている人々も止まっていた。

自分だけが動ける時間。

不気味な雰囲気の中黒衣をまとった一人の男がふらりと現れた。

「いつまでそうしているつもりだ？」

金色の瞳が不気味に輝くが顔がぼやけていて優には分からなかった。

出来ることなら二度と目を合わせたくなるようなそんな異常な圧力が男の視線に宿っている。

優は何もいうことができない。

「ふふ、何も気づいていないようだな。まぁいい。いずれまた会うことになるのだから。」

それだけを言い残し男は空間に吸い込まれるかのようにして消えていった。

ドクン・・ドクン・・ドクン

自分の心臓の音がこんなに聞こえたことがないと彼は感じた。

いつしか周りの景色は動き始め何事もなかったかのように時は流れている。

（なんなんだ、あいつは・・・。）

どうしたわけか吐き気がして彼はその場にひざまづいた。

乱れる視界に抗うように必死に目の前にある木に意識を集中させるがやがてぐらぐらと視界が揺れてきた。

（やべえ・・・千鳥は??・・・）

助けを求めたいがなぜか声も出ない。

そして彼の体に限界が近づいたとき再び周りの空間のときが止まったのを彼は感じた。

（また、あいつか？）

ぐるぐると回り続ける視界の中、先ほどの男とは明らかに違う、ただ金色に輝く光に包まれた少女の姿だけがとらえることができた。

「大丈夫だよ。君の体には一時的な混乱が起こっているだけなんだから。」

どこか聞き覚えのある声だったが思い出すことは出来ない。

ビビっとテレビが消えるときのように彼の思考は途切れ深き眠りに向かっていった。

優の隣にたたずんでいた金色の少女はすっと倒れている彼を抱き起こし木にもたれかからせる。

その表情はどこか懐かしむような哀れむようなはかないものだった。

そして再び景色が動き出したとき少女の姿は遥かとおくになっていた。

暑い夏の日のこと2（後書き）

すこし不穏な空気が漂う今回。
いずれも優君に深い関係の人達ですがその関係が明らかになるのは
まだまだ先の話ですw
しばらくの間は彼を取り巻く周囲のキャラたちをよく見てやってく
ださいな^^

暑い夏の日のこと3

しばらくして美術館から出てきた千鳥に起こされた。

「あんた疲れてるんじゃない？」

心配そうにたずねてくるが優の頭はぼーっとしていた。

しかし徐々に意識がはっきりしてくると果たして先ほどの異変が本当であったのかとも思う。

（夢・・・・・・じゃないよな。）

体はそういっているものの常識で考えればありえるはずのないことだった。

実際体に異常もなくあれだけ気持ちがわるかった吐き気も嘘のように消えている。

ゆっくりと起き上がりあたりを見回すがやはり男の姿も少女の姿も見つからなかった。

「・・・・・・・帰ろう、優。」

千鳥に促されるまま彼は歩き始めた。

途中サンライズを抜けたあたりで千鳥が喋り始める。

「ごめんね、なんか体調悪くなっちゃったみたいで。」

「・・・・いや大丈夫。昨日寝るの遅くなっちゃって、たぶんっそれがたたってるんだと思う。」

もちろん彼なりの配慮の利いた言葉である。

「それより、美術館はどうだった？」

「ん・・・少し調べたいことがあってね。大分まとまってきたんだけどさ～」

「そっか、ならよかった。」

結局どこかギクシャクした雰囲気の中二人の家の前についた。

篠宮邸はかなりの大きさで門から本館につくまでに広い庭がある。木造の由緒あるような家づくりで詳しくは聞いていないがそれなりの名家だったのだろうと優はおもっている。

対して千鳥の家はごく一般的な二階建て家屋でその後ろに何軒か同じようなつくりをしている家が続いている。

「それじゃあまたあした。」

どちらからともなくそういってそれぞれの家に入っていった。

その夜、彼は夢を見た。

遠い昔のことであろう。

彼には重度の記憶障害がある。

いったいどこに住んでいて、何故に国に保護されたのか・・・。そして優という名前が果たして本当の名前なのかも全て知らなかった。

はたしてそれが原因なのか分からないがこうして夢の中でまったく知らない土地や人と会話していたり暮らしていたりする光景を見てしまうのだ。

その中でも今夜は何度も目にしてきた光景。

黒くよどんだ空を見上げている自分。

無数の銀の羽が散り体が崩壊していく夢。

（あぁ・・・はやく終わりが来ないかな・・）

思っては見るものの夢の世界はそれを許してくれない。

犯した罪の大きさの責任を取れというようなひどく残酷なことを課せられているようで。

～自分～は泣いていた。

それでもやっとのことで目を覚ますことが出来た。

はぁ、はぁ、はぁ

胸が苦しくなってベッドから起き上がる。

汗で体中が濡れてひどくいやな感じである。

浴室に行きシャワーを浴びながら思う。

（今日はやっぱり体調がよくないみたいだ・・・）

ひとつだけいえることがあった。

この夢を見るときのこと。それは必ず前段階として何か異変が起きているときに起こりえるのだということ。

今回のようなケースは初めてだったが優はかつて幾度となくそれを感じていた。

穂菜川のほとりに物凄い大きさの雷が落ちたとき。

不気味な白い煙がどこからともなく沸いていて空のほうへ流れていったとき。

舞の両親が亡くなったとき。

他にもいろいろな場面がその夢の前にあったのだ。なにを意味して

いるかは分からないが思い出そうとすると白いもやが掛かってしまいそれが叶わない。

（思い出したところでどうするんだ？）

必死になれば何か分かるかもしれない。それでも今の彼にはそれを求める勇気がなかった。

平和な日常がなくなってしまいそうで。

（それに舞は？）

身寄りのない彼女についていられるのは自分だけだという思いが邪魔をする。

「いつまでそうしているつもりだ？」

どこまでも重くのしかかる黒い男の声。

（・・・・・・・俺は・）

答えようとした時にはすでに寝室の前まで来ていた。

何も考えないようにして眠りにつく。

今度は何も思い出さないようにと願いながら。

暑い夏の日のこと3（後書き）

本作はパラレルワールドが鍵となります。

それが実世界なのか夢の中の世界かは徐々に明らかにしていくつもりです。

一回の執筆量が遅くてすみません。

ある程度したらひとつにまとめたいなぁなんておもってます^^

暑い夏の日のこと４

優と千鳥は青嶺学園という泉市では唯一の私立高に通っている。

入学試験はさほど難しくはないのだが付属ではないので勉学に非常に力を入れて入れている学校である。

校長である月岡氏はとても温厚な人物で滅多に留年させたりはしないのだが、あるボーダーを越えてしまった生徒たちにはかなり恐れられている。（これが何を示しているのかは普通の生徒には分からない。）

そのせいか進学率はすこぶるよく、教育熱心な親たちはこぞってここに入学させるそうだ。

故篠宮誠司（舞の父親）は月岡氏と親交があったようで優は当然のようにそこに通うことになった。

もっとも月岡氏自ら推薦したような感じであるので他の生徒にはこのことはあまり言わないようにしているのだが。

また病院で暮らす舞においても月岡氏の厚意で形式上は青嶺の生徒になっていて特別待遇でテストの点がボーダーを越えていれば進級できることになっているのだ。

成績自体は優より少し出来てしまうあたり彼女に嫉妬してしまう優。

優や舞、それに千鳥は今年で二学年になる。

ちなみに二学年というのは理不尽なことに一番最上階、つまりは３階に当たるのだがやたらと階段が長いこともあって青嶺の二学年は滅多に一階に下りてこないという話もある。

「ふぅ、ふぅ、ふぅ・・・・」

優は朝から息を切らして魔の階段を上っていた。長い、長すぎると思いながら懸命に上るのだがその隣をスーッと一気に登っていく生徒がいる。

「あんた、少し体力とか脚力つけたほうがいいんじゃない??」

千鳥の痛烈な言葉を浴びながらも優はなんとか一日の難所を乗り切った。

優はＤクラス、千鳥はＥクラスであるのでまさに学校でも隣なのである。

ということもあり毎日一緒に登校するのであるが・・。

「ってえ！！！」
いやな予感が的中した。

彼の右腕に乗っているのは一匹のリス。

爪をつきたてているのでかなり痛い。

とそこに

「千鳥先輩おはようございます！」

挨拶をしながらやってくるのは千鳥の所属している陸上部の後輩である間宮空（まみやそら）。毎回同じ時間に三階にやってくる。

短めのショートで見るからに活発そうな少女である。

「俺には挨拶なしか？」

優の問いを軽く受け流す空。

なぜか初対面のときから空の態度はこんな感じであったから優も最初は戸惑っていたが大分慣れてきた。いまでもその態度が何を意味するのかはわからないのだが、徐々に打ち解けてきた感じはする。

優の腕にしがみついているリスは彼女が飼っているリスで‘むーちゃん’と呼ばれている。

むーちゃんは空の合図で優のほうから彼女の方に向けて跳んだ。

「むーちゃんおおきくなったね～！」

千鳥になでられてうれしそうに顔をこするような仕草をするリスをみて優はなんだか無性に腹が立った。

「リスのくせにませてんな・・・。」

小声で言ったはずだったが、空、もといむーちゃんに聞こえてしまったらしい。

再び優のほうにダイブすると思い切り彼の体に爪を立てた。

「痛い、痛い・・・・勘弁してください！」

見るに見かねた空がとめるまで離れないものだから空がこのリスに何か仕込んでいるのではないかと優は思った。

「あんたも馬鹿よね、毎回おんなじ様なことしてさ！」
ね～と顔を見合わせる女子二人。
「・・・・・・。」
それでも何もいえないあたり彼が下にしかれる理由でもあるのだろう。
（情けねえな、おれ・・・）
心の中で思ってみるもののなんだかんだいってこの学園生活が優には楽しくて仕方がなかった。
「あ、そうそう。千鳥と空、今日の放課後暇なら御崎海岸に行かないか？ほら、例の件で。」
「いいよ～私、今日暇だし。空は？」
「
本当は暇じゃないんですけどね～。千鳥先輩が行くならいきますよ。
」

感謝しなさいとばかりに横目で後輩から見られている優。

「さんきゅー、じゃあ四時に校門のところでまっててくれ。」

らじゃ！となにかの部隊が敬礼するような真似をして千鳥は自分の教室に入っていった。

対して空はじっと優の顔を見つめていたが

「失礼します。」

といって足早にその場を後にした。

「・・・・・・。」

空の反応がいまいちよく分からないがそれでも来てくれるのがうれしかった。

そんなところ、彼女たちと入れ替わるようにしてやってきたのはクラスメイトの大野慎一である。

「うっす、篠宮！」

「おお、慎一か。ちょうどいいところに来てくれた。今日千鳥や空と一緒に御崎海岸を見に行くんだけどお前もこれるか？」

「う～ん・・・・五時過ぎまでなら大丈夫だ。」

「全然大丈夫。四時くらいに校門で待ち合わせてるから。」

「おっけ～」

彼、大野慎一は青嶺学園ボクシング部の期待のホープでバリバリの短髪にボタンを下まで開け放しているいかつい感じの少年である。根はいいやつなのだが前の学校では数々の問題を起こしたという噂も立っていて少しクラスでは浮き気味な感じは否めない。

それでもどちらかというとおとなしめで見るからに人のよさそうな優とは誰が見ても親友というような間柄であり、千鳥を除いて舞を知っている数少ない心を許せる存在である。

優はクラスでは舞の存在を公言しておらず一部の教員を除いて知っている者は少ない。

というのもあえて言ったところで軽い気持ちで同情されるのが何より彼自身が嫌っていることだったからである。

今回御崎海岸に行く目的というのも来年の夏、１０年に一度の大きな祭りが御崎海岸であり病態が悪くなっていれば舞もその祭りに参加できると担当医が言ったのである。

おそらくいけるといってもなるべく負担をかけないように車椅子での見学になるので、あえて一年前の今やる必要がないのだが彼女が通って大丈夫そうなルートを確認しておこうということで４人で決めたのである。

ちなみに空と舞は面識はなくお互いの名前は知っているというかんじだが空が以外にもあっさり了承してくれた。

「はぁ～あと一年か～！」

結局は優が楽しみでいてもたってもいられず計画したわけであるが皆嫌がるわけでないのをみてやはりいい友達を持ったと心からそう思った。

ぽんぽんと慎一の肩を二度たたき二人で教室に入っていった。

暑い夏の日のこと４（後書き）

優たちの学園生活の一幕です。

空と慎一と言う二人のキャラクターは物語において重要なポジションに位置するので皆さん見逃さないでねｗ

そろそろこの章は終わりを迎えます。

これからもよろしくお願いします。

光の先導者１

優たちが学園に着いていたそのころ、２－Ｅの担任である深大寺百合子は自分の自転車を必死でこいでいた。

先日あった旧友たちとの飲み会により、今朝の寝坊にいたったわけである。

「まったく、私は何をしているのやら・・・。」

思わずつぶやく。

黒くつややかな髪をなびかせながらもその速度はサンライズ北通りを走る車の速度と対して変わらない。

千鳥や空の所属する陸上部の顧問で現役時代は全国クラスの選手であった。

そんな彼女はどこか油断していたのかもしれない。自分が走ればある程度は間に合うだろうと。

しかしこの日は運が悪かった。

普段は車どおりの少ないサンライズ北通りも今日は隣の市である大掛かりなライブコンサートがあり、その通過地点として泉市は大変混雑していた。

「あぁ～！もう間に合わないじゃない！！」

車が邪魔していつも使っている近道を通ることが出来なかったのである。

深大寺はやむを得ず自転車のむきを変えて普段通らないほうの道を通ることにした。

それが災難の原因であろう。

彼女が通ろうとした十字路で出会いがしらで車と正面衝突したのである。

深大寺はさることながら車側もかなりのスピードを出したらしく辺りは騒然となった。

見れば彼女の自転車はめり込むようにして車にめり込んでおり見る影もなくなっていた。

運転手はあわてたのか車から降りることなく自転車が張り付いたままアクセルを踏んだ。

「おい、こっちくるぞ！！」

集まっていた人だかりが車の暴走を見て散っていく。

理性がないのか反対車線の車も巻き込むような運転でそのまま走っていった。

しかし肝心な被害者、深大寺百合子は目を丸くして何事もなかったかのように少し離れた場所に立っていた。

「あんた大丈夫かい？」

事故の瞬間を目撃していた者達が口々に言って集まってくる。

彼女は驚きのあまり声が出せなかった。

確かに車が目の前まで来たのはいやなほどまでに鮮明に覚えているのだが・・・。

周囲にいた人達によって深大寺は一時病院へ搬送されることになった。

警察もその後やってきて現場を調べるが車のブレーキ跡などを見ても分かるように怪我がないなどは奇跡に近いとのこと。

辺りの混雑の収集はいよいよつかなくなり、そのコンサートは開始時間が遅れた。

暴走する車は止まらなかった。

運転手の男は人をひき殺してしまったという罪悪感と恐怖で顔が真っ青に変わってった。

ましてやなんであのときに止まらず逃げてしまったのだろうかと今

頃になって後悔していた。

それでも、男の暴走は止まらずすでに何回か他の車との接触を起こしてしまった。

「もう止まれねえ・・・」

泣きそうな男の前に一直線に向かってくる金の光。

男には何がなんだか分からなかったがその光は止まることなく右前輪に突き刺さった。

車体が傾く前に左前、右後、左後、と次々に光が突き刺さりどのタイヤも一様に吹き飛んだ。
タイヤをなくしボディで地面をするような形で道路を滑っていたがその上方からもまるで釘を

刺すかのような一陣の光が車体を貫きあれだけ暴走していた車が静かに止まった。

男はわけも分からずようやく外に出た。

するとボンネットの上に乗るようにしてたっていたのがその場に似合わない異国の少女だった。

煌びやかな金髪に翡翠色をした大きな瞳。

大きなマントに身を包んだ少女は、びしっと人差し指を突きたて男を指差した。

「たまたまボクがあの場に居合わせたから良かったものの・・・・そうじゃなかったらあの女の人は死んでたかもしれないんだよ！」

見た目とは裏腹な子どもっぽい喋り方をする少女に男の口はぽかんと開いていた。

少女は喋り続ける。

「それを君は逃げた挙句、たて続きに事故を起こすなんて・・・・・
ボクが警察につきだしてやるんだから！！」

警察、ときいた男の目つきが変わる。

「うるせえ！餓鬼がえらそうな口を利きやがって！」

先ほどの光のことなど忘れ、猛然と少女に向かって殴りかかった。

が、当たる寸前のところでひらりと少女はかわした。

男は何発も殴り続けるが一向に当たらない。

少女は右腕を高々あげて口にした。

「反省の色、まったくなし！」

男の殴ってくるのにあわせて少女は上げていた手を差し出した。

「はっ！！」

男の腕より速く少女の手のひらが男の腹部に触れると一瞬のうちに発光し男の体が吹き飛んだ。

ガツンとガードレールに背をぶつけ男は気絶した。

少女は腕力はないのか、ゆっくりとその男の体を引きずってみていた大人たちに差し出した。

「後はよろしくお願いします。」

ぺこりと丁寧にお辞儀をする少女。

大人たちは感嘆と畏怖であいまいな返事すら取ることができなかった。

その様子を察した少女は足早にその場を後にする。

「やりすぎちゃったかな～・・・・でもあの人が悪いんだからしょうがないよね、正当防衛、正当防衛。」

テクテクとあるいていたがやがて何かを思い出したように少女は歩みを止めた。

そして腕にしていた時計を見ると顔色を変える。

「うぅ・・・・また時間に間に合わなかった・・せっかく居場所を突き止めたのに～。」

まぁいいか、と一人で納得する。

「ユウは元気でやってるのかな？早くあの子の学校に行かなくっちゃ！」

光の先導者１（後書き）

いよいよ先導者といわれる異能な方々が姿を現します。

乞うご期待！

よろしければコメントくれるとうれしいです！

光の先導者2

サイレンの音が聞こえる。

午前の検診を終え自分の病室へ向かおうとしていた舞は窓を少しのぞいてみた。

「なんだろ。また事故でも起こったのかな。」

サンライズ通りは人通りが多く道もそれなりに入り組んでいるので事故は多い。

救急車がやってきて正面入り口の前へ止まった。担架でもつかって運び出すのかと思っていたところ、患者と思われる女性はわずかな支えを受けて自らの足で病院の中へと入っていった。

「不幸中の幸いとでも言いましょうか・・・。」

ふむと一人でうなずいている少年が舞の横に立って今の光景を眺めていた。

その少年、水玉模様のパジャマを着ていて、弱冠であるが目が青い。

舞はこの少年を見かけたことがなかった。新しく来た入院患者なのだろうか。

「君は何号室の子かな？」

舞は優しく少年に話しかけてみた。すると少年はその態度が気に食わなかったらしく、わずかにむっとして目を細めた。

「あなたが篠宮舞さんですね。」

「えっ・・・。」

何故この少年は自分の名前を知っているのだろうか。

すくなくとも長年この病院に居る舞である。

それなりに顔は広いはずなのだが。

「そんな驚かないでください。私は優くんの友達なだけですから。」

少年の言葉を聞いて舞はようやく納得が言ったようだった。

「舞さんはいい弟さんをお持ちで大変うらやましい限りです。私の弟なんか不出来なもので・・・。」

見る限り少年は小学校に通っているような年齢ではない。その弟といえばせいぜい4，5歳が限度だろう。

不出来も何もないような気がするのだが。

「だめだよ、ちゃんと弟の面倒は見ないと。」

「そうですね・・・そうします。それでは。」

少年はくるりと背を向けた。

しかしすぐに振り返って思い出したように彼は言った。

「危うく忘れてしまうところでした。優くんにお伝えください。近々あなたの旧友が遊びに来ると思います。名前は・・・まぁあえば分かるでしょうが、一応その人物が来るということを教えていただけるとうれしいです。」

それだけ口にして少年は歩き出した。

「ちょっと待って・・・君の名前は??」

一瞬立ち止まりそしてにこやかに振り返って言った。

「理緒です。龍堂理緒と申します、それじゃあまた今度。」

今度こそ少年は舞の視界から消えるように階段を下りて行った。

舞はわずかだが理緒という少年の名前を聞いたことがあった気がしたのだが、まだこのときまでは分からなかった。

光の先導者２（後書き）

変な子登場！！

でも～・・・のちのちわかるけど～

鬼です・・・鬼畜野郎なんですｗ

ってことで次回もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0037h/

Incarnation

2010年10月8日22時36分発行